

# 総合教育会議記録

1. 日 時 平成28年4月25日(月) 午後 4時00分 開会  
午後 5時15分 閉会

2. 場 所 条里南庁舎 会議室

3. 出席者 横手市長 高橋 大  
横手市教育委員会  
教育委員長 二階堂 衛  
教育長 伊藤 孝俊  
教育委員 柴田 康裕  
教育委員 加賀谷長吉  
教育委員 今仲 和代

4. 説明のため出席した者(8名)

総務課長	栗田 律子
教育総務部長	皆川 規和
教育総務部次長兼教育総務課長	高橋 功
文化財保護課長	高橋 輝幸
教育指導部長	佐藤 宣延
教育指導課長	高橋 玲子
学校教育課長	高橋 純
学校教育課政策監	遠藤 美紀子
学校給食課長	上法 満

5. 事務局 総務課文書法規係長 佐藤 和志  
教育総務課総務係長 富山 直美

6. 会議に付した事件

- (1) 横手市の教育に関する大綱について
- (2) その他

7. 会議の経過と結果

開 会 午後4時00分

## ●皆川教育総務部長

ただ今から平成28年度第1回横手市総合教育会議を開会する。本日の進行は教育委員会教育総務部長が担当するのでよろしくお願いする。はじめに高橋市長と二階堂教育委員長からご挨拶をいただく。

## ●高橋市長

教育委員各位においては、平素から教育行政全般にわたりご尽力、ご提言いただいております。この場をお借りして心より感謝申し上げます。本日は今年度第1回目の会議であり、教育大綱に関しこの先5か年について議論していただく。その他も含め教育行政全般について幅広いご意見をいただければありがたい。

横手市は合併して10年になる。これからは新たな10年に向けて市民、老若男女総動員でこの地域の発展のために押し上げていこうという思いで呼びかけし、私も先頭に立ってやっている。皆さまにおいても各立場で発信や盛り上げを行い貢献いただいております。ありがとうございます。

横手市においてはさまざまな諸問題があるが、問題の解決には対処療法なのか根本的なものを直していくのか。対処療法は手当てするだけなのでやることは見えているが、そもそもの課題の根源を改善することが大変なのだと思う。その根源は人の行動、人の心、人の生活習慣に起因するわけであり、そう考えると行き着くところは教育ということになるのだと思う。本来は家庭教育、地域教育、また自らがさまざまな書物や体験をとおして育てていくことだと思うが、何か欠けたまま育った大人もいる。今では家庭や地域でやるべきことを学校に丸投げしている親御さんも残念ながらいる。教育の大事さを再度確認し、次の世代、そのまた次の世代ではそのようなことがないようにという意味において、これからはしっかり頑張っていければと思う。

これまでの10年の間に学校統合計画があり、大森小学校から始まり、十文字中学校、横手明峰中学校、横手北中学校、雄物川小学校、大雄小学校に続き先日は横手北小学校が開校した。次には第二次学校統合があり、十文字地域内の4つの小学校を統合し平成33年の開校を目指していく。今後も皆さまからアドバイスや助言をいただければありがたいと思う。何はともあれ社会の基礎は教育にあるので、引き続き忌憚のないご意見を願います。

## ●二階堂教育委員長

昨年、総合教育会議を開催しており今回が通算2回目になる。市長の言葉にもあったが、人として生きていく上で教育は欠かせないものであり、今回このように市行政と教育行政が話し合いを持つということは大変有益なことだ。本日の会議は教育に関する大綱についての議題であり、これから市として、市教育行政としてもより良い方向に向いていけるものと思っている。本日の会議では活発なご意見やご質問を出してもらいたいと思う。よろしくお願いする。

### (1) 横手市の教育に関する大綱について

〔説明〕

## ●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

【〔議題(1)資料〕を基に説明】

大綱は、横手市の最上位計画である第二次横手市総合計画基本構想前期基本計画からなるもので、平成28年度から平成32年度までを目標としているものであるが、この中の教育関連施策を本市の教育振興基本計画である第2期横手市教育ビジョンとして位置付けているので、これをもって大綱に代えることとしたい。大綱について文部科学省の通知や見解では、施策についてはその目標や根本となる方針を定めるものであり、詳細な施策について求めているものではないとされている。対象期間は4年から5年程度とされている。また、教育基本振興計画その他の計画を策定している自治体はその中の目標や施策の根本となる方針が大綱に該当すると考えられることから、地方公共団体の長が総合教育会議において教育委員会と協議、調整し、当該計画をもって大綱に置き換えることとした場合は、別途大綱を策定する必要はないとされているため、今回の大綱の策定にあたっては、市の最上位計画である横手市総合計画をもとに教育振興基本計画となる横手市教育ビジョンを策定しているため、これをもって教育大綱に代えることとしたい。

〔質疑〕

なし。

●皆川教育総務部長

教育大綱については先に教育委員会を開催し、第2期の教育ビジョンを決定いただき、それを持って教育大綱に代えたいがよろしいか。

●伊藤教育長

市長が大綱を決定することが明記されているので、最上位にある横手市総合計画を無視した教育ビジョンは有り得ない。それを参酌し、国や県の振興計画との整合性をもった上で策定したものであるため、市長にはこれを大綱として認めていただきたいと考えている。

●高橋市長

常々話していることが内容に盛り込まれている。このまま頑張って進めていただきたい。

●二階堂教育委員長

教育ビジョンについては先に開かれた会議において、これでいこうと確認しており、何ら問題ないものと考えている。

●皆川教育総務部長

本案を了承することにご異議ないか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

第2期横手市教育ビジョンをもって教育大綱に代えることとする。

(2) その他

●皆川教育総務部長

平成28年度の新たな取組み等について教育長が説明し、これについて意見交換をしていただきたい。

〔説明〕

●伊藤教育長

【[その他 資料]を基に説明】

今認めていただいた教育ビジョンを基にしてその年の施策についてしっかりと計画を立てこの先の5年間はビジョンに副った事業展開をしていかなければならない。教育計画そのも

のはこれまでと考え方を変えている。これまでの教育目標は時代に合った素晴らしいものだったが、どちらかと言えばそれぞれが個々にこういう人になっていきたいと思いますというニュアンスを感じ取れるものだった。それも教育にとっては大事なことなのだが、これから先を考えたときに最も大事なものは何かということで教育計画を見直した。まずは、郷土に誇りを持ち、郷土を他に発信できることが一番であり、市長も常々言っているとおりだ。そして人としては共生、共同し、人との関わりの中で自分の役割をしっかりと果たせるような人間で、自分の住んでいるところで自分の力を発揮することができる人を育てていくことが、今後の10年においてはとりわけ必要だと思ったので、共に語り、共に未来を切り拓くこと、共生や共同という部分を取り入れて教育目標を定めた。これは即ち、楽しく学び郷土愛あふれるまちづくりに直結していくものと考えている。そこでこの教育ビジョンでは、大きくは学校教育の充実や教育環境の整備、生涯スポーツの促進、生涯学習の推進、伝統文化の検証と再発見というような項目立てで施策をまとめている。これを基にして今年度とりわけ頑張っていきたいと考えていることについて話をする。

まず一つ目は、十文字地域の小学校統合の推進に関わることとして、それ以外にも長寿命化対策、これからの学校施設をどう運営していったらよいかの諸計画を立てなければならぬ時期に差し掛かっているので、FM計画との整合性も含めながら考えていきたい。二つ目は、横手の歴史文化の再確認であり、関わった方々や地域の方々へ丸投げしてきた部分があるのでないかと思われる。学校教育そのものの中でも伝統文化の理解を積極的に進めることが横手を愛する気持ちに直接つながるだろうということで、これからの10年については積極的に学校教育が関与していく体制を作りたい。そのために横手を学ぶ郷土学の総合テキストを作成するなど事業展開をしながら、横手に今ある文化を再度見直しして未来につなげていく体制づくりをし子どもたちの教育へ活かしていくことになる。三つ目は、民度の高い子どもたちを育てていくことだ。その意味では図書館の務めは大変大きいと考えている。学校における読書指導の充実のための学校司書の全校配置が市長の理解を得てかなっている。今年度は市の予算以外にも寄付金を図書費として上乗せして図書館の充実を図っていきたい。公立図書館との連携も含めて頑張っていきたい。四つ目には、学校教育そのものの充実を図るほかに、中学校区ごとに市が研究指定をすることだ。ある中学校区が研究した結果を公開し、それを見た次の中学校区がそれを参考にしながらさらに研究を深めていくというリレー方式の研究体制を平成21年度から進めてきた。国指定や県指定で特定の学校だけに特化した形で新聞紙上に取り上げられることがあるが、それだとそのときだけで終わってしまう。研究会としてはそれではダメで、必ず次の年、さらに次の年へとつながる体制の中で研究を進めていくことが大事だ。市単独で指定し、それを継続して今に及んでいるし、これからも継続していく。今までは授業改善をして子どもたちに授業の中で話し合いをさせながら課題を解決していくスタイルの授業研究をここ8年ほど続けてきたが、話し合いを充実させるためには話す人がいろんなものを持っていなければならない。これからの10年は、個々がそれぞれの引き出しをどれだけ持つことができるかに注目し、本や新聞を読む全校体制での基盤づくりに力を入れたいと考えている。それにプラスして授業改善を重ねていけば、本来の意味の民度が高い子どもたちになっていくのでないかという仮説の基に昨年からの方向性で研究を進めている。今後もその積み重ねを継続していきたい。五つ目としては、学校教育

課では幼保小の連携を子ども未来担当が担っているが、これまでの子育て支援課対教育委員会という構図ではなく、子育て支援課プラス教育委員会という構図とし、幼保小のつながりの部分をしっかりフォローしていくことだ。幼保は小学校を意識した指導内容を考えていかなければならないし、小学校は幼保で何をしてきたかを一番に考えて子どもを育てていくという連携を今後は強めたいと思う。その点に関しては市へもお願いしながら進めていきたい。6月補正には幼児教育アドバイザーの配置に関する補正をお願いする予定であり、これは幼保小をつなぐアドバイザーを雇用して、その方々の力を借りながら事業を推進していくものなのでご理解いただきたい。最後には、学校給食における40パーセント前後にある横手市内産の食材使用率をできるだけ伸ばしていくことだ。秋田県内産の使用率は高まってきている。合併当初の使用率と比較すれば学校給食課の頑張りにより農家会との結びつきも強固になってきており、その努力もしていく。

歴史文化の話に戻る。市民の皆さんにもそのような機会をこれまで以上に拡充していきたい。ビジターセンター等々の建設や施設の設置については、市長の考えもいただきたいし前向きに検討いただきたい。大学との連携も進み、関係者が横手に来てしっかりとした研究ができる環境づくりをしていくことが将来的には横手の文化発信には有効になるだろうと考えている。

#### 〔意見交換〕

#### ●二階堂教育委員長

教育委員会としても今年度力を入れていくという意味においては横手を学ぶ郷土学が一つの柱となっているし、関連して郷土資料館、ビジターセンター、図書館へ今まで以上に教育委員会としても力を注いでいかなければならないという思いが共通してある。何をやるにせよ、予算なしでは物事が動いていけないので、たとえばビジターセンターはどう考えていけばよいのかについて何かあればご教示いただきたい。

#### ●高橋文化財保護課長

【[国史跡大鳥井山遺跡ビジターセンターの整備について]の資料を基に説明】

#### ●高橋市長

ビジターセンターを検討することは結構だ。旧鳳中学校をなんとかできないかという話は議会からも話題として出ていたはずだ。前からあった話題が表舞台に出てきたことだと思う。旧鳳中学校は位置的にはよいと思うが、大型バスが入るには改良が必要となることが課題となる。土地勘がありバスで大きく周りながら旧鳳中学校へ向かうとしても技術的に難解な部分があるが、歴史的な価値に対して光を当てて市民はもとより多くの人に知ってもらうことを通じて横手をアピールしていくことは大事だし、大学が研究の場にしたいと言っていることも有り難いことだ。ビジターセンターの先にある次の展望が広がっていくものと想像できるし、そのようにしていかなければならない。地域の価値を眠らせたままにしておくのか活かすのかどちらかを選択しなければならないとすれば、私は活かしていくほうを考えていきたいと思っているが、どういう手順で、どのような財源でということを考えれば、大きな事業でもあるので慎重には慎重を重ね、気運を積み上げていくことが大事になってくると思う。横手を学ぶ郷土学など、まずはソフトからアプローチして少しずつ子どもや多くの住民の気運を高めていくことは大事だし、遊休施設の活用を考える意味でも大事だと認識し

ている。話題を広く出してもらいながら、夢や展望を描きたいし発信していくべきだと思っている。

先ほど農林部との会議があった。地場産が60パーセントの小坂町と40パーセントの横手市の間の20パーセントの差は大変なものだ。人口差があるので人口に比例するだけの大変さは確かにある。冬場の材料の確保は難儀するが、しっかり保存できる保冷庫のようなものを国の補助事業等で出来ないのか、仮に補助事業がないとしても展開していくために国の補助事業の制度を考えてもらうよう国に要望していくなど、いろんなアプローチで地場産比率を上げていく。実現できれば横手の食材の豊富さを市内外にアピールできる。農業政策セクションと教育セクションの融合による発信と、それにより商工業にも結び付けるような取り組みは全国的にも注目されることになる。冬場にストックできれば6次産業化にも結びついていくし、福祉施設等で活用してもらうことで供給元をある程度大きく確保できれば、それを基礎にして商売に広げていくことができる。単なる学校教育という枠で考えず、もっと広い枠で見れば別の展開を期待できる。給食の食数は6,000食なので大ロットの食材を一年間を通じて供給できることは大きなアピールになる。現状に甘んじず、今の能力でパーセンテージを上げる努力をしていきながら、さらにステージを上げられるような逆転ホームランを打ちたいのでよろしく願います。

#### ●上法学校給食課長

一番のネックは1月から3月までの地場産の使用量だ。平成27年度は12月の時点で秋田県産の使用率が50.1パーセントだったが翌年3月末で45.7パーセントに、横手産は43.7パーセントあったが3月末で39.8パーセントへ落ちている。カップ野菜の冷凍加工をして保存するようなものがあればいいのではないかと思う。生で納めてもらう場合は機械に通す関係上、規格の統一が要求されるが、規格外のものであってもカットすることによって食材としてすぐに使える大きなメリットあると考える。それには加工施設と貯蔵施設が必要となる。大仙市にはそれをしている農業法人もある。

#### ●高橋市長

学校給食課だけで考えず、農林や商工へ話を振ってみてはどうか。部局横断で目指していきたい。

#### ●伊藤教育長

季節によって使用率がぐっと落ちることを解決するために、規格外のものをどう活用するかが合併当初の課題だった。カットできる施設があることと、野菜が出ない季節であっても冷蔵しておくことによって飛躍的に上げていくことができると思う。規格外を持ち込まれても給食センターでは現在処理できない。そのところだ。

#### ●加賀谷教育委員

スポーツのまちづくりの中でのアリーナ構想の断念は残念だった。既存の施設へ金をかけていくことで当面は凌いでいけるが、これまでキャパシティの問題や耐久性の問題がずっと付いてネックになってきた経緯がある。金をかけて当面を凌げればいいのかという延命措置でいいのか、これからの展開に向けて市長はどのように考えているのか。

#### ●高橋市長

東北で一番集まりやすいのが横手市だと考えていた。アリーナが実現していれば、スポー

ツであれコンサートであれ、展示会、フォーラムなども含めて機能したと想像できるしそのような自信もあったが、議会の判断を率直に受け止めて断念せざるを得なかった。既存の施設に修繕を加えながら、今ある身の丈でソフト的な部分で付加価値を高めていくしかない。今までどおりの人海戦術や発信の仕方や面白い工夫をしながら今までどおりの範囲の中で人を呼び込む戦法でいくしかないと思っている。

●加賀谷教育委員

防災施設や後方支援の面から見てもやはりアリーナは必要だと誰もが思うのではないかと。市民の感覚とのズレを感じているのだが。

●高橋市長

アリーナは自信を持って提案したものだ。特例債が5年延びるという知らせが唐突だったので、それからの検討だった。議会でも元々そのようなものがあればいいという一致した意見があったので、議会に設置していただいた梯子を登り提案したものだ。運営と経営がある中で、私は経営的な感覚で提案したが、議員の皆さんは運営の感覚で物事を見ていた。今あるものを粛々とやっていく運営ではなく、私は企業経営の立場で今ここに投資しなければ成長戦略が奪われてしまうという感覚だったので、感覚のズレがあったと思う。ただ安全運転で事故を起こさなければいいというのではなく、成長していくための展開を矢継ぎ早にやっていかなければならない。今の横手市では右肩下がりに沈んでいってしまうので、沈まないために一生懸命漕いでいる状態にある。そこから陸に這い上がるためには余程のエネルギーと発想が必要になってくるので提案した。諦めムードにある中では前向きなアクションは怖いものがある。これから更に弱っていく中において歳を重ねた後ではもっとできなくなっていく。議会から別の提案をいただけることを期待したい。横手市には1,000人しか泊まれないが、花巻市には9,300人が宿泊可能だ。同等の自治体にありながら、宿泊施設が花巻市の9分の1しかない横手は満室にならない。冬場の1月や2月は宿泊率が50から60パーセント程度だ。通過型で一人当たり1,000円を使うとすれば、宿泊の場合は一人10,000円を使うと言われるように着地型になればそれぐらいの効果がある。かまくらに用事がなくてもアリーナに用事がある人もいたと思われる。また別な展開を別な方法で考えていきたいと思っている。

●皆川教育総務部長

他にご意見がないようなので、これで平成28年度第1回横手市総合教育会議を閉会する。

閉 会 午後5時15分